

児童養護施設入所児童の現在の自己のあり方とその 支援に関する臨床心理学的研究

高橋, 佳代

<https://hdl.handle.net/2324/1807138>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名 : 高橋 佳代

論 文 名 : 児童養護施設入所児童の現在の自己のあり方と
その支援に関する臨床心理学的研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、児童養護施設入所児童の自己のあり方を捉え、その知見に基づいた支援について検討することであった。特に、施設の中核的目的とされる自立支援のための有効な視点を得ることに重点をおいた。自立のための進路決定行動は将来の自己像や進路目標との関わりで行われる。よって、本研究では時間的展望の視点から、児童の現在の自己に対する意識性だけでなく、将来の指向性や希望など幅広く捉え、入所児の自己のあり方を理解した。

これまで施設における実証研究の中心は、入所児童の行動や情緒の特徴を捉えるものであり、入所児自身の自己理解のあり方を捉える研究はほとんどない。本研究では入所児童がどのように自己を捉えているのか明らかにするため、意識化され概念化された自己の側面である「客体としての自己」と他者との相互作用で瞬間瞬間に主体として認知される自己の側面である「主体としての自己」双方の視点から検討した。

他方、施設では被虐待児童の増加と対応の難しさが議論の対象となっている。子ども期の虐待体験は認知や情動に影響を与えるだけでなく、感覚運動反応や身体感覚、感情コントロール等広範囲に渡り影響を及ぼすことが示されている。虐待体験が身体と神経系に重大な影響をもたらすことを踏まえ、虐待を受けた子ども達への支援にあたっては、言葉に基づく理解や共感だけでは不十分であり、心身両面からのアプローチが必要である。

以上の視点から、研究の方法論として、「客体としての自己」を捉えるために質問紙調査法を用い、児童の過去や現在、未来に対する意識性について検討を行った。また、「主体としての自己」を捉えるための方法論として臨床動作法を中心とした身体感覚に注目した援助アプローチについて検討を行った。

第1章では本研究の対象である社会的養護および児童養護施設の現状と課題についてまとめた。文献レビューにより、施設入所児童は社会性の問題や注意の問題、愛着障害症状や自己調整の問題等の行動特徴を持つことが示された。さらに、臨床実践研究のレビューによると、入所児童のセラピーにおいては強い攻撃行動や依存行動が多く表出されること、児童が自分の気持ちや自己経験に向き合うことは難しいことが示されている。これらから、施設入所青年の持つ難しさとは、彼らが自分とは何か、何を為すべきかといった自己や自己経験と向き合う難しさを持つことに起因し、それが、彼らが抱える主観的な生きづらさに繋がっていると考えられた。

第2章では、本研究の問題の所在と目的について示した。青年期前期は両親からの自立と依存との葛藤から様々な症状が出現する時期と言えるが、施設入所青年は家庭的基盤がなく、過去に十分な依存体験を持っていない場合が多い。よって、施設入所青年が示す多くの問題行動を考える際には、社会的養護特有の課題性を踏まえ基礎知見を積み重ねる必要がある。以上の論点を踏まえ、本研究の目

的とそれに応じた方法論について述べた。

第3章では、調査的手法を用い、入所児童の客体としての自己のあり方を実証的に捉えた。本章では時間的展望の観点から、児童の現在の自己に対する意識性だけでなく、将来の指向性や過去の捉え方などを幅広く捉え、入所児の自己のあり方を理解した。検討の結果、施設入所児童の肯定的な未来展望には、生活充実感が間接的に、現在の肯定的時間的態度が直接的に影響することが示された。即ち、児童が今現在をどのように捉えているかという現在の時間への態度や、現在の生活の中で感じる充実感など、児童が現在の生活の中で得る感覚や主観的意味付けが未来展望と関連すると考えられた。これらを踏まえると、彼らの将来への捉え方の変容を検討していくには、生活の中で瞬間瞬間に知覚される主体としての現在の自己にアプローチする必要があると考えられた。

また、入所群においては、一般群と異なり、自尊感情が未来の時間的態度に影響を与えないことが示された。自尊感情項目への回避的回答の可能性などが考えられ、方法論の改善が必要であるが、一方で入所児童の自尊感情を育む視点からの取り組みが必要である。これらがどのようになされていくのか、次章以降で児童支援の具体的実践過程について検討していく必要性を示した。

第4章第1節では、入所児童の臨床動作法を用い現在の自己にアプローチすることによる未来展望の変化について検討を行った。入所児を対象に、臨床動作法セッション前後における自己評価、希望、不安の変化を検討した。その結果、セッションの前後において状態不安得点が有意に低下し、希望得点は有意に上昇したことが示された。第2節では、問題行動が頻発する高校生女子に対して臨床動作法を用いた支援を継続的に行い、臨床動作法プロセスにおけるどのような自己の変化が問題行動消失に寄与するのか検討を行った。面接プロセスの中で事例は、意図通りに動こうとする中で、日常では無意識に行っていた動作を対象化し、不適応的な自己のあり方に気づいていった。さらに問題行動の背景にあると考えられた過度に力を入れ無理をするという自己のあり方を面接プロセスの中で変容させ、新たな構えを獲得する過程で問題行動も消失した。この過程で重要であったのは、自己身体を動かそうとする意図と実際に生起する身体運動の一致の体験であったと考えられた。意図通りに身体を動かすことができたならば、それは自己身体と自己存在への確かさの実感が伴うと考えられた。第4章から主体としての自己にアプローチすることにより児童の未来の捉え方が変容すること、アプローチする手段として身体感覚に基づいた支援が有効であることが示された。

第5章では、臨床的展開としてグループアプローチについて検討を行った。臨床動作法等を用い様々な身体を感じを体験できるようなアプローチの効果を検証した。その結果、グループアプローチの有効点として、現実的な集団場面をセラピーとして取り扱うことによる入所児同士の対人関係性の肯定的変化などが挙げられた。一方で、集団場面であるが故の過度の緊張や落ち着かなさ等が見られ、留意点や検討点も明らかになった。

総合考察では、入所児童の自己のあり方の特徴を踏まえ、具体的援助方法と自立支援についてまとめた。施設入所児童の過去や未来への時間的態度には、一般群に比べ、より現在の自己のあり方が影響することが示された。即ち、自立支援に向け、入所児童の将来への態度の変容を促すのであれば、児童の現在の自己のあり方に注目する必要がある。生活の中で感じられる「主体としての自己」が変容していくことにより、過去や未来への捉え方も変容する可能性が示された。具体的な援助方法としては身体感覚に働きかける有効性が示された。臨床動作法プロセスの中では、自己身体の様々な感覚を捉えながら意図通りに動くという対自的な努力が求められる。即ち、臨床動作法は児童に身体感覚を通じた自己対峙体験を提供すると言える。その中で意図と動きの一致体験が得られたならば、自己身体および自己存在の確かさの実感を得ることができる。この「確かにここにいる自分」という自己存在の確かさの実感が、施設入所児童の自分とは何かという自己との向き合いの土台となり、自立に向かう自己成長に寄与するのではないかと考えられた。